



岡部 正人さん(権現堂)

取材者：認定NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：5月17日

避難先の桑折町で得た知恵や経験を活かして、これからの浪江の役に立ちたい

平成27年8月から、桑折駅前団地の初代自治会長を務める岡部正人さん。
平成22年1月にお母様が亡くなり、家の片付けや大掃除に追われている時期に震災が起きました。あの日は、一人で拭き掃除をしていたようですが、家がすっかり片付いていたため被害もなく、ライフラインも止まらなかったの、のんびりしていたそうです。
避難から桑折町の応急仮設住宅、桑折駅前団地(災害公営住宅)へと、暮らしは目まぐるしく変わりましたが、常に「何かお役に立ちたい」という思いを強く抱きながら、しかし軽やかに周りの方々のお世話に取り組んでおられます。



▲岡部正人さんを真ん中に、[右] 妻の崔淑華さん(日本語読み：サイ シュクカ/中国語読み：ツイ シュウファ)。[左] 娘の岳瑋瑩さん(日本語読み：ガク イエイ/中国語読み：ウェイ ユン)

町桑折出張所の臨時乗員をしたり、浪江民の一時立入りの添南相馬市で浪江町をのりこみ、4月に入るとあちこちに仮設住宅が出来始め、川合さんが桑折町の仮設住宅に入居。聞くと住環境が良さそうだったので、7月1日に私も入居しました。南相馬市で浪江町をのりこみ、4月に入るとあちこちに仮設住宅が出来始め、川合さんが桑折町の仮設住宅に入居。聞くと住環境が良さそうだったので、7月1日に私も入居しました。

鼓の保存活動も応援したいですね。また、私の本籍地は、今では珍しい標葉町なので、縁があったら郷土芸能「標葉せんだん太鼓」の保存活動も応援したいですね。

◆避難中、辛いことは何一つ無かった。運がよかったんです。平成23年3月12日の朝6時頃いつもお世話になっていた近所の女性から避難指示のことを教えられ、車に乗って津島保育所に避難。100人ほどでしたが、津島の方々がとても良くしてくださって、夜は温かいお味噌汁に温かいおにぎり、漬物などを頂きました。ストープもあり、本当に恵まれていました。3月15日、もっと早く避難するようにとの指示があり、一緒に避難した女性は迎えに来た娘さんの車で避難することになり、車を貸してくださったんです。翌16日に二本松市役所で手続

をして、300人くらいの方が避難していた東和体育館に行き、4月10日までいました。浪江の仮設場がすぐ傍にあり、支援助物資の受入基地もあったので、衣食住に不自由することはありませんでした。30〜40人を1班として8班を編成。一人で避難し身軽だった私は、8班の班長として役場との連絡や支援助物資の仕分けなどを手伝ったんですよ。後に桑折駅前応急仮設住宅の自治会長をされた川合さんも一緒でした。猪苗代町の中ノ沢温泉「平澤屋」に二次避難をすることになり、川合さんと息子さん、私が相部屋でした。温泉には7軒の旅館があり、それぞれ世話人を決め、私とその代表となつて町との交渉や支援助物資の仕分けをしました。4月に入るとあちこちに仮設住宅が出来始め、川合さんが桑折町の仮設住宅に入居。聞くと住環境が良さそうだったので、7月1日に私も入居しました。

◆桑折町での新たな生活。これからの浪江。平成27年4月に中国遼寧省の女性と結婚しました。20才になる娘は美容師を目指して勉強しています。よくできた妻で、私には至れり尽くせりの上、儉約家で綺麗好き。趣味は洋服のリフォームと貯金。本当に幸せです。私は、桑折駅前団地自治会長として、集会所を活用したサロン活動や周辺の花壇整備などを積極的にを行い、団地と地域住民との交流を図りながら、地域への貢献を心がけています。桑折町役場や地域の人たちは本当に良くしてくださいます。今では、18才で上京して母の介護で戻った浪江町よりも、桑折町のことを良く知っているくらいです。リフォームが済んだ権現堂の家は浪江駅に近いので、お盆やお彼岸に帰省する方々の交流の場にできないかと考えています。桑折と浪江を往復する生活になるかもしれませんが、これからは浪江のお役に立ちたい。また、私の本籍地は、今では珍しい標葉町なので、縁があったら郷土芸能「標葉せんだん太鼓」の保存活動も応援したいですね。

浪江のこころ通信

第73号

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散避難をしています。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるため一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されています。

この「浪江のこころプロジェクト」は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。
3・11から6年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信」第73号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0240(34)4593



郵便はがき

料金受取人払郵便

原町局承認

1609

差出有効期限 平成30年 3月31日まで有効

双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7番地2

浪江町役場 企画財政課 「広報なみえ」担当 行





松本サチ子さん(請戸)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：5月27日

請戸の海や魚料理を懐かしく思い出しながら、 これから自分の身体や時間も大切に過ごしたいです



▲お世話になった園長 平塚堯子先生(左)と松本さん(右)。松本さんと平塚先生は、同い年。明るく元気で活動的なお二人です。

平成24年4月号に掲載された松本サチ子さんは、息子さんと山形県山形市に暮らしています。調理師の仕事、自宅近くの畑での野菜作り、朝のラジオ体操と、忙しくも楽しい毎日を過ごしておられます。

◆**保育園調理師としての日々**
調理師として約20年、双葉厚生病院に勤めたので、そのことを知った友人から「どうしても手が足りないので手伝ってほしい」と言われ、山形市にあるひらつか保育園に勤めることになりました。リウマチも患っていたし、こんな風にこの年まで仕事できるとは思わなかったですね。
調理師2名で50食分の食事を作るのですが、私は体が小さいから鍋が大きくガス台も高くて大変！背伸びして調理しています。やっぱり魚を煮るのは、浪江の時から慣れているので得意ですが、卵や小麦、乳製品などのアレルギーを持っている子もいるので、注意し

◆**これからの愉しみ**
山形県で復興支援員をしていた方が2か月に1回開催している「山形浪江コスモス会」にも参加しています。15名くらい集まり、皆町のことがかつての町民同士なのでいろいろな事を話すことができますし、一品持ち寄りでも気兼ねなく楽しい時間ですね。
また、友人3人で畑を借りて野菜作りをしており、これからの季節は収穫が楽しみです。なすやきゅうり、玉ねぎ、にんにく、らっきょうが獲れます。肥料や虫よけにもみ殻を燃やしたもので燻炭を使い、工夫して育てており、土を触ってストレス解消にもなります。仕事

◆**思い出す請戸の海や魚料理**
町に戻ること考えると、若い人の働き口はあるのか、町がお年寄りばかりになってしまっているのでは、戻るのは不安が残っています。原発がなければ近くに家を建て、請戸の海も眺めていられたかもしれないですね。自宅の目の前が海でしたから、「もってけー」と知り合いの漁師さんからよく魚をいただいていた。懐かしく思います。早く放射能の影響がなくなり、請戸にまた魚が揚がるとういなど思っています。
山形でお友達もでき、毎朝一緒にラジオ体操や温泉に行った。保育園でも園長先生はじめ、先生方に仲良くしてもらい植木やお花をもらったりして、いい方ばかりです。こちらにもお友達がいっぱいいるので、できれば山形で早く落ち着く家を見つきたいと思っています。



高野 一郎さん(請戸)

取材者：認定NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：5月29日

原発20km圏内は、我々の魚場。 船方はやはり海に一番

震災前は、ヒラメやカレイ、小女子などの漁をされていた高野さん。現在も海の仕事をされていますが、奥様によると、震災後、日々の献立は大きく変わったそうです。獲れたての美味しい魚が毎日食べられなくなったことについて、「震災前は当たり前だったけれど、こんなに贅沢をしていたのか」と思うこともあるそうです。

来年春には浪江町の町営住宅に移られるそうで、今からご夫婦で楽しみにされています。また、91才になるお母様も、少し足は弱くなったものの、とてもお元気とのこと。



▲「年を取っても、自分たちの食べる分くらいの魚は獲るよ」とおっしゃる高野さんの言葉がとても印象的でした。

◆**魚場の片付けやサンプリング調査が、今の仕事です**
平成24年10月1日に、この南相馬市原

◆**あちこち避難をしたが、早く浜通りに戻りたかったですね**
3月11日、まさに震災が起きた時刻には、相馬双葉漁業組合請戸支所の職員たちと共に、港で作業用電源の位置決めをしていました。
地震で道はガタガタでしたが、浪江町内に住む長男の嫁と孫の様子を見るために、港のすぐ前の家に戻り、母と妻を伴って避難も兼ねて向かいました。家中は散々でしたが、皆無事で、高台にある幾世橋小学校と一緒に避難しました。午後4時ごろに浦尻の船主さんから「浦尻は全滅」という話を聞き、おそらく請戸も駄目だろうと思いましたが、ですから、津波は見えていないのですよ。
12日の朝、原発事故による20km圏内の避難指示が出て、南相

馬市小高区の妻の実家に移りました。その後、30km圏内も避難指示となり、妻の姉の家族など4家族で飯館村の親戚宅へ身を寄せ、15日までお世話になりました。
飯館では携帯電話がつかず、埼玉県本庄市に住む妹とやっとな連絡がとれたものの、ガソリンがなくて困っていたところ、義弟の新潟の友人が届けてくれて、16日朝に出発できました。一般道を走ったのですが、大渋滞。首都圏の道にも不慣れたこともあり、ようやくその日の夜12時に到着しました。
5月30日まで約2か月半、本庄市にはお世話になりましたが、その間、組合の役員として何度も福島との間を往復しました。6月からは福島市御山の借上げ住宅に1年3か月ほど住みましたが、冬はいつも空がどんよりしていて、浜の抜けるような青空が見えなかったです。

町区の借上げ住宅に移ることができました。その年、田んぼに打ち上げられて比較的損傷が少なかった船を宮城県松島で修理し、平成25年4月から鹿島港に置いて、組合の持ち回りで行っている、福島県や東京電力の依頼による瓦礫の片付けや海水、砂、魚などのサンプリング調査に、私も2か月に1回程度携わっています。
でも、その年の7月に脊髄梗塞を患い、車椅子の生活を約1か月強いられました。左手左足にやや痺が残っていますが、今は仕事ができるくらい回復しています。そして、今年の2月下旬からは請戸港を拠点に活動しているんです。
海や魚のサンプリングをしているからよく分かりますが、第一原発の周辺3km×5km圏内も含めて、福島の魚は安全です。今、11種類の出荷制限をしていますが、ネットは風評被害だけ。震災以前より魚は増えていますが、仲買をする人が大幅に減っています。平成30年度中には、浪江でも市場が再開される予定ですので、この状況が好転するように頑張りたいと思っています。